

## 『茨木のり子の家』

茨木 のり子／詩(平凡社)

NO IMAGE

自宅のすりガラスが装丁の本書。表紙をめくると、愛用のメガネに谷川俊太郎さん撮影のポートレート、そして見開きいっぱいの玄関ドア。真鍮のドアノブを押して家の中へ。まるで茨木さんに招き入れられたかのように。続いて階段、居間、書斎、四季折々の庭、どれをとっても趣味のいい暮らしぶり。

茨木さんの詩に最初に出会ったのは「自分の感受性くらい」だった。自分自身を持って余っていた頃、「ばかものよ」と叱られた気がした。一人で生きていこうと決意した時、「寄りかからず」が背中を押してくれた。その椅子は居間にあった。最後の頁は自身の手による死亡通知。どこまでも潔い。読み終えた後、「またいらっしやい」と茨木さんにいわれているようだった。それから私は、度々この家を訪れている。「ちゃんと生きよう」いつもそう思えるから。(奥村)

## 『命の後に咲いた花』

綾崎 隼／著（アスキー・メディアワークス）

NO IMAGE

第1志望の教育学部に入学した  
はるな  
榛名なずなには教師になるという夢  
があった。

そして、それは彼女の6歳年上の  
はみやとうや  
クラスメイト羽宮透弥も同じだった。  
自然と透弥に惹かれていくなずなは  
思い切って透弥に告白。

物語は二部構成で、一部では、なずなの大学生活や透弥への思い、二部では、ぶっきらぼうだけど、なんだかんだと本当は優しい透弥の視点で恋人榛名のことが描かれています。読み進めていくと、所々で“うん？”と不思議に感じる違和感。でも、気になったことは後半に“そういうことか！”と全ての謎が解けます。また、タイトルが意味するものとは？恋の季節、春到来！恋から遠ざかっているあなたも恋愛真っ最中のあなたも、愛しくてせつない恋を、ぜひ、味わってみてください。（澤）

## 『ひとり日和』

青山 七恵／著（河出書房新社）

NO IMAGE

母親が仕事で外国に行くことになり、東京の親戚の家に居候することになった二十歳の知寿<sup>ちず</sup>。その家にいたのは、二匹の猫と暮らすおばあさん、吟子さんでした。ふたりが一緒に暮らした一年間の物語です。

描かれるのは、特別でない人たちの何でもない日常です。誰かと一緒にいることは、嫌な思いもするし面倒くさい。反対に一緒にいたいと思う人でも、いつかはいなくなる。思い通りにいかないことばかりだけど、それでも人は、人と関わることで変わっていく。そんな日々が淡々と語られます。

物語のラストで、知寿はひとつ決断をします。「今、自分の気持ちを無視したら、何も知らないままここに居座ることになるかもしれない」と。春の手前、新しい場所に行くことへの不安と寂しさ。それと少しの期待が感じられる小説です。（荒川）

## 『ずーっとずっとだいすきだよ』

ハンス・ウィルヘルム／えとぶん(評論社)

NO IMAGE

犬のエルフィーとぼくは共に育ち、遊び、いたずらをし、何をするのも一緒でした。家族のみんなもエルフィーの事を愛していました。しかしそんな

楽しい時も東の間、エルフィーはやがてぼくよりも先に老い始めました。弱っていくエルフィーの世話をしながらぼくは「エルフィー、ずーっと、だいすきだよ」と語りかけます。やがてエルフィーは死んでしまいますが、ぼく以外のきょうだいはエルフィーに「好き」を伝えないままでした。ぼくだけがエルフィーに「好き」という気持ちを伝えていました。

大切な人がいなくなった時、後悔の無いように出来る限りの精一杯をしてあげたいと思いました。「ぼく」はちゃんと言葉に出していたから辛い別れも受け入れる事が出来たのでしょう。今は悲しいけれどこの悲しみは永遠に続くものではない、いつかはちゃんと思い出にして向き合える時がくるのだというその先を感じさせてくれます。(三井)

## 『豚の死なない日』『続・豚の死なない日』

ロバート・ニュートン・ペック／著（白水社）



主人公のロバートは、貧しい農家の息子で12歳です。ある日、ロバートは、隣家の牛を命がけで救い、そのお礼に生まれたての牝の子豚をもらいます。ロバートはこの豚にピンキーと名前を付けて、自分の妹のように可愛がります。しかし、ピンキーは

不妊症であることが判明。一家には豚をペットとして飼う余裕などありません。ロバートはピンキーを殺さなくてはならないという、過酷な運命を受け入れることになります。

続編では、父親の死後、一家に降りかかる厳しい現実と向き合い、大人へと成長していくロバートの姿が描かれています。久しぶりにこの2冊を読み返しましたが、ロバートと運命を共にしながら、周りの人々の愛情ももらい、読後幸せな気持ちに浸りました。前を向いて歩く力をこの2冊からもらえること間違いなし。大人にも中高生にも是非。（世古）

## 『ルドルフとイッパイアッテナ』

齊藤 洋／著（講談社）

NO IMAGE

主人公は岐阜のリエちゃん家の飼猫ルドルフ。ひよんなことで飛び乗ったトラックで東京に来てしまいます。突然の野良猫生活に戸惑うルドの前に現れたのが、イッパイアッテナと名乗るボス猫。彼に気に入られたルドは、イッパイアッテナから野良猫として

生きる方法とともに、教養のある猫になるために読み書きを教わります。そうして自分が岐阜という町にいたことを知り、そこに帰るためにはどうすればいいのかを考えるようになります。さて、ルドは無事にリエちゃんの待つ家に帰ることができるのでしょうか？

児童書は子供が読むものと思いませんか？子供から大人まで楽しめるのが児童書です。大人の方も是非児童書コーナーに来て、新しい出会いにワクワクして下さい。字が大きいのもちょっとうれしい！？（松宮）

## 『鷹のように帆をあげて』

まはら <sup>みと</sup>三桃／著（講談社）



九州を舞台に不器用な少女と飛べない鷹の成長を描いた青春小説。

小学生最後の春、理央は親友の遥とペットショップで鳥のヒナを見かける。だが、その帰り道に遥は事故で亡くなってしまふ。1年後、理央が鳥を見に行くと、堂々とした風格のタカ

になっていた。タカに魅せられた理央は「モコ」と名付けて飼うことにした。モコを飛ばして遥に見せたいと思い訓練を始める。タカの飼い方について調べたが図鑑も載っていない。そこでヒントをもらいに鷹匠<sup>たかじょう</sup>の女子高校生に会いに行く。彼女から愛情と覚悟があれば飛ばせるという前向きな言葉をもらった。モコはやっと鳥小屋の屋根まで飛べるようになったが、そこから先は進歩がなかった。行き詰まったなか、高校生がくれた助言は、風に向かって飛ばすというものだった…。男友達との方言による会話も心温まる。（寺崎）

## 『きみの行く道』

ドクター・スース／さく・え（河出書房新社）

NO IMAGE

現代のマザーグースといわれるドクター・スースが86歳の時に発表した絵本です。

これから進む未来には明るいことがたくさんある。時にはそうじゃないことも起こるかもしれない。それでも前へ進んでいく…。

自身も読んでみて、確かにこんなことがあるなあと思感出来る場所がありました。

また、「だいじょうぶ」「できる」などといった前向きな言葉が背中を押してくれます。子どもから大人まで、新しい一歩を踏み出す時におすすめの一冊です。

自分の人生でこの場面はこの出来事に当てはまるなあと思いつきながら読むのも面白いのではないのでしょうか？

英語の原書もありますので、ぜひご覧ください。（田原）

## 『リボン』

草野 たき／著(ポプラ社)

NO IMAGE

中学二年生の亜樹は「人とうまくやろうと思ったら、自分の意見なんか引っ込めてしまったほうがいい」と信じ、何事にもあたりさわりなく振る舞ってきました。ところが、卓球部の卒業イベントで、先輩にリボンをもらえないことにはじまり、パートナ

ーとのダブルス解消や家族同士の喧嘩など様々な出来事が続き、亜樹は少しずつ変わりはじめます。

亜樹が抱える家庭や学校での人間関係の悩みや将来への不安は誰もが一度は立ち止まって考えるテーマではないでしょうか。悩んで、挑戦して、うまくいかない時は、もう一度考えてみる。飾らず、まっすぐ自分と向き合う亜樹の心の動きが細やかに描かれているところが魅力です。

先輩の卒業式から一年、亜樹はどんな卒業を迎えるのか。読めば、きっと一歩前に踏み出したくなります。(神山)

## 『太陽の棘』

原田 マハ／著(文藝春秋)

NO IMAGE

表紙と裏表紙に、二枚の肖像画が描かれている。終戦直後の沖縄に派遣された米軍精神科医エドと、故郷である沖縄復興のために帰ってきた画家のタイラである。

ある日、エドは戦いの爪跡が残る町で若き画家たちの村「ニシム

イ・アートビレッジ」に辿りつき、運命的な出会いを果たす。

アメリカと沖縄、太平洋を隔ててそれぞれ生まれ、大きな戦争を体験した。占領するものされるもの、支配するものされるもの、彼らを分け隔てる現実がたくさんある中で、お互いが持つ<sup>アート</sup>美術を愛する心で深い絆が結ばれていく。

そんな中、米軍少佐がタイラの画家仲間を失明させる事件が起こる。エドは自身を抑えきれず少佐を殴ってしまう。

エドの实在モデルと出会い、ニシムイの展覧会を見た著者が実話に基づいて紡いだ感動の物語。(伊藤)

## 『くちびるに歌を』

中田 永一／著（小学館文庫）

NO IMAGE

これは長崎県五島列島の中学校合唱部が仲間と共に成長する、ある一年を切り取った青春グラフィティーである。

産休に入る音楽教師の友人、自称ニートの美人ピアニスト柏木先生がやってきた。女子だけだった合唱部

が、顧問となった先生目当てに男子の入部が殺到した。部員が多くなり、混声合唱を試みるも東の間だった。先生がいないとやる気をださない男子を否定する女子が増えはじめ、次第に合唱部はばらばらになる。そんな時、Nコン（NHK全国学校音楽コンクール）の課題曲「手紙～拝啓十五の君へ」にちなみ、十五年後の自分たちに手紙を宛てることになった。思いの羽を手紙に託し、いざNコンに挑む。誰もが通過する学生時代がみずみずしく描かれており、読了後は爽やかな気持ちになれるそんな作品である。（永屋）

『たいせつなこと』マーガレット・ワイズ・ブラウン／さく  
レナード・ワイスガード／え  
(フレーベル館)

NO IMAGE

シンプルな文章に奥の深いメッセージ。それぞれのページ見開きごとに、ひとつのテーマがあり「たいせつなこと」を教えてくれる絵本です。

「あめに とって たいせつなのは  
みずみずしく うるおす と いうこと」  
「そらに とって たいせつなのは

いつも そこに ある と いうこと」(本文より)など、素敵なフレーズが、詩的に続きます。何気なく過ごしている色々なものを見て、色々なことを感じるでしょう。

昔より豊かになりモノがあふれている今。大切なことを見失いがちです。何かにぶち当たって迷った時や落ち込んだ時に、「あなたに とって たいせつなのは あなたが あなたで あること」の言葉を思い出してみてください。そんな時にそっと寄り添ってくれる一冊です。(西川)

## 『ツバメ記念日—季節風 春』

重松 清／著（文芸春秋）

NO IMAGE

別れ、出会い、旅立ちの季節である“春”をモチーフに、家族の物語を中心に描かれた心温まる12の短編集です。心に迫るストーリーは、どれも味わい深く、共感できる部分があります。誰もが抱いたことのある複雑な気持ち、大人になって初めて分かる

親の愛情など・・・物語を通じてじんわりと伝わってきます。切なさと共に、春の日差しのような温かな読後感を残してくれる物語ばかりです。その中でも特に印象深かったのは、親子愛を描いた「めぐりびな」と「さくら地蔵」、姉弟愛を描いた「せいくらべ」、そして表題作「ツバメ記念日」です。ぜひ、この季節に、1編ずつじっくりとお楽しみいただきたい作品です。本書は、『季節風』シリーズの「春」ですが、同じシリーズで「夏」、「秋」、「冬」もあります。それぞれ季節に合わせてお読みいただくのもおすすめです！（辻）

## 『ロコ！思うままに』

大槻 ケンヂ／著(光文社)

NO IMAGE

この作品にはいくつかの短編が入っています。表題作「ロコ！思うままに」は、自分を神イエス様だという父親を持つロコという少年が主人公のお話です。見てはならない醜いものを隠してくれる闇こそが安穩だと教えられ、暗く狭い限られた世界の中で生活してきました。しかし、そんなロコの

前に一人の少女が現れます。リサと名乗るその少女との出会いはロコに大きな決断をさせます。ロコは初めて父親の教えを破ってまで自分で何かをしてみたいと思い始めたのです。光は悪だと教えられ、ずっと暗闇の中で生きてきたロコは、外の世界に飛び出したいと願います。決して逆らうことのできなかつた父親という絶対的存在を前に、ロコはどう行動するのか。一人の少年の出会いと、父親からの旅立ちに心を動かされる物語です。(伴)

## 『青い光が見えたから 16歳のフィンランド留学記』

高橋 絵里香／著（講談社）

NO IMAGE

中学校卒業後、単身でフィンランド留学へ旅立った少女の物語。なぜフィンランドだったのか？…そこには、ある一冊の本との出会いがあったという。友人や先輩との関係に悩み、信頼していた先生にも裏切られた中学校生活。自分自身を見失うような

過酷な環境のなか、彼女の心の支えとなったのが「ムーミン」童話であり、その故郷フィンランドへの憧れだった。

異国で言葉の壁や想像を超える文化の違いに直面しながらも、友人らに支えられ、次第に自分を取り戻していく彼女。年々自信と輝きを増す写真の表情がなんとも眩しい。かの地で得た多くの幸せな出会いは、彼女の努力と行動力、そして素直な魅力が引き寄せたものだろう。清々しさと勇気、そしてフィンランドへの好奇心を刺激する一冊。そして私はもう一度、「ムーミン」を読みたくなった。（但田）

## 『春や春』

森谷 明子／著(光文社)

NO IMAGE

ちょっとマイナーで、でも熱さならどこにも負けない、高校生たちのバトルフィールド——それが“俳句甲子園”。俳句が大好きな須崎茜は、趣味を理解してくれる友人トーコとの出会いをきっかけに、大会出場を目指して同好会を立ち上げることに。

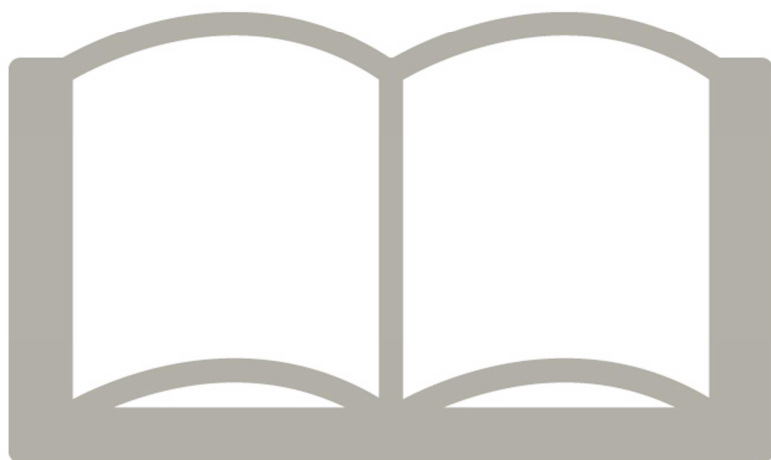
仲間集め、友情、成長、ほんのり淡い想い。これぞ王道、という青春小説です。集まったメンバーにはそれぞれコンプレックスもあるけれど、とにかく感性の鋭さが眩しい！彼女たちが見出す、17文字の世界の豊かさに圧倒されます。

こっそり驚いたのは俳句の大会の描写。勝手なイメージで穏やかな鑑賞会のようなものを想像していたら、なかなかどうして、激しい舌戦。まさにバトルです。茜たちを応援しつつ、自分にも活を入れるために、この一句を。

春風や闘志抱きて丘に立つ——高浜虚子（小島）

# 司書オススメ図書あんない

市立図書館の本棚から  
選りすぐりの一冊をご紹介します



# 司書オススメ図書

## あんない vol. 2

今号のテーマ

***GOOD LUCK!!***

**～前へ進もう～**



2016年3月20日発行

近江八幡市立図書館